

「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」展 開催記録

—アーカイブズ展示の試み—

木下紗耶子*

A Report of the exhibition, "Tange Kenzo 1938-1970, From Pre-war period to Olympic Games and World Expo":

Case Study of Exhibition from the Aspect of Archives

KINOSHITA Sayako

This paper is a report of the exhibition "Tange Kenzo 1938-1970, From Pre-war period to Olympic Games and World Expo" in 2021. The exhibition focused on the first half of the career of architect Tange and consisted of Sections, 1. War and Peace, 2. Modernity and Tradition, 3. Postwar Democracy and Government offices Architecture, 4. Challenge to Massive Space, 5. Designs in Information Society and High Economic Growth, and 6. Integration of the Five Keywords. There are approximately 170 pieces of materials on display. The exhibition was curated by Toyokawa Saikaku based on his research at NAMA, and the materials were selected from diverse collections. In this way, the exhibition was a case study in the disclosure of the architectural design process and the plurality of subjects involved in its creation, a characteristic of exhibitions using archival materials.

キーワード：建築アーカイブズ、展示企画、丹下健三
Architectural Archives, Curation, Tange Kenzo

1. はじめに：NAMA における展示活動

国立近現代建築資料館（以下、当館）は全国的な建築アーカイブズ・システムの構築を目的に、以下の事業を展開してきた。1) 情報収集、2) 資料の収集・保管、3) 展示・教育普及、4) 調査研究等である¹。この4つの柱のなかでも、展示・教育普及の一環として建築資料の一般公開を通じて、より広く社会に近現代の建築資料および建築文化に触れる機会を提供するべく、当館では2013年の開館以来、年に2回の展覧会を開催してきた。展示活動は、他の3つの事業と密接に連携しており、館内での日常的な資料整理や調査、および館外協力者によるワーキンググループ体制での調査・研究の蓄積に基づくものである。

本稿の目的は2021年7月21日～10月10日に開催された展覧会「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」展（以下、丹下展とする）を振り返りその開催記録を残すことである。筆者は2020年度に企画担当研究補佐員に着任した。本稿では、筆者が着任以降に資料調査や資料借用、展示設営等の業務に携わった立場から、経緯や展示内容を振り返り、丹下展の特徴

やアーカイブズ展示の意義を考察する。

2. 展覧会開催の経緯

本展覧会は、2014～2016年に行われた丹下に関する建築資料の所在調査を元に組み立てられたものであり、丹下が大学を卒業した1938年から大阪万博が開催された1970年までの前半生の業績について、関連資料の網羅的な調査を踏まえて紹介するものであった。展覧会に先立つ調査および展覧会のキュレーションは、豊川斎赫氏（千葉大学大学院准教授）に担っていただき、また千葉大学および勝原基貴氏（千葉大学特任研究員、現・金沢工業大学講師）に制作協力をいただいた。

展覧会は、当初2020年7月からの開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による東京オリンピックの延期に伴い、4月に1年間の開催延期が決定された。これを受け、2020年度は豊川氏を中心に展覧会の調査・研究を継続し、内容を一層充実させることにあてられた。2020年度の調査では、写真家・石元泰博との交流を通じた丹下による桂離宮理解についての研究、1950年代に丹下研究室の研究生として成

*元国立近現代建築資料館研究補佐員、練馬区立美術館学芸員、学術修士

城の自邸や旧東京都庁舎等に携わった田良島昭の旧蔵資料の調査、そして雑誌『新建築』の編集長として戦後の建築批評を牽引した川添登の旧蔵資料の調査が行われた。これらの調査に基づき、キュレーションは再構成された。また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で会場での展示公開が不可能になった場合に備えてウェブコンテンツの拡充の準備も進められた。

3. 展覧会概要

3.1. 展示構成

展示は全6セクションで構成された。1から5セクションで丹下の建築活動に関するキーワードが示され、セクション6ではそれらを統合する作品としての国立代々木競技場が紹介された。展示資料は図面、スケッチ、写真、映像、模型、文書、雑誌、丹下健三旧蔵の個人資料などを含む約170点（一部展示替えを含む）であり、同時代資料とともに、複製や近年制作された参考資料を織り交ぜた展示であった（表1）。資料の所蔵元は、内田道子アーカイブ、高知県立美術館、東京大学生産技術研究所川口健一研究室、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻デジタルミュージアム準備室、千葉大学豊川斎赫研究室、東京造形大学、秩父宮記念スポーツ博物館・図書館、香川県立ミュージアム、ハーバード大学デザイン大学院フランス・ローブ図書館および個人所蔵者等、多岐にわたる。

以下、各セクションのタイトルと概要、主な展示プロジェクトを記載する。各セクションの概要は豊川氏の解説文より抜粋、要約したものであり、詳細は展覧会に合わせて制作された図録を参照されたい。

セクション1：戦争と平和

丹下は、大正時代に生まれ20代後半から30代前半に第二次世界大戦を経験したが、戦前・戦後を問わず、戦没者として如何に向き合うかを設計上でのテーマとした。そして、戦争を生き延びた市民と戦争で亡くなった人々を結び付ける建築を模索し続けた。

展示プロジェクト

- ・大東亜建設忠霊神域計画（1942）
- ・広島平和記念公園及び記念館（1952）
- ・戦没学徒若人の広場（1966）
- ・丹下健三「都市計画」講義ノート（大歳幹夫記）（1952）

セクション2：近代と伝統

丹下はル・コルビュジエのソヴィエト・パレスなどを読み解くことで近代建築を理解し、卒業設計「芸術の館」に反映した。また、ワルター・グロピウスや石元泰博らと共に写真集『桂』（1960）を編集、出版するなかで、丹下は伝統建築に関する独自の理解を発展させた。丹下自身が設計した成城の自邸では伝統建築の要素を併せ持つ近代建築が実現された。

展示プロジェクト

- ・卒業設計「芸術の館」（1938）
- ・成城の自邸（1953）
- ・成城の自邸増改築案（1964 頃）
- ・『桂』（1960）
- ・墨会館（1955）
- ・旧草月会館（1958）

セクション3：戦後民主主義と庁舎建築

庁舎建築においては、都心部（都市のコア）に多くの市民が集い、政治参加を体感できるような戦後民主主義を具現化するデザインが目指された。丹下は、労働者が都心部に集まることを前提に、彼らが快適に働き、過ごせる都市のコアと庁舎を一体化することを目指し、都市と建築を結び付けることを試みた。

展示プロジェクト

- ・旧東京都庁舎（1957）
- ・香川県庁舎（1958）
- ・今治市庁舎・公会堂（1958）

セクション4：大空間への挑戦

本セクションでは丹下が構造家・坪井善勝と組み、様々なシェル空間が実現されたプロセスを紹介した。当時高価であった鉄の使用を避け、また耐震性の問題を克服しながら、シェル構造による大胆な造形が目指された。

展示プロジェクト

- ・平和記念広島カトリック聖堂（1948）
- ・広島子供の家（1953）
- ・愛媛県民館（1953）
- ・駿府会館（1955）
- ・香川県立体育館（1964）
- ・東京カテドラル聖マリア大聖堂（1964）
- ・クウェートスポーツセンター計画（1970）

セクション5：高度経済成長と情報化社会への応答

高度経済成長や情報化という社会変化を捉えて、丹下は新たな都市ビジョンを構想した。そして丹下は線型の都市モデルとしての東京計画1960を発表し、都市や国土を客観的に把握するための国土開発地図を作成した。

展示プロジェクト

- ・静岡中心市街地区再開発計画「静岡計画」(1959)
- ・ボストン湾25000人のコミュニティ計画(1960)
- ・東京計画1960(1960)
- ・旧電通本社ビル(1967)
- ・山梨文化会館(1966)

セクション6：五つのキーワードの統合

丹下の最高傑作と評価される国立代々木競技場を紹介した。この競技場は1964年東京オリンピックのために建設され、2021年のオリンピック・パラリンピックでも使用された。セクション1から5までで紹介してきた丹下のデザイン手法は、国立代々木競技場で統合され、かつ現在も維持活用されている。

展示プロジェクト

- ・国立代々木競技場(1964)

3.2. 展覧会図録

丹下展に合わせて制作された図録は全84頁、各セクション解説と図版、関連論考が掲載された。当館では展覧会ごとに図録を制作している。丹下展図録もこれまでの形式を継承し、会期中は展示を見る際の補助資料であるとともに、会期後は、展覧会記録となるよう展示した資料や解説を可能な限り盛り込んでいる。なお丹下展図録は国立国会図書館に収蔵されており、閲覧可能である。

以下に丹下展図録における論考の執筆者とタイトルを掲載順に記す。

- ・加藤道夫(国立近現代建築資料館主任建築資料調査官／東京大学名誉教授)「丹下健三1938-1970 他者ル・コルビュジエを介したナショナル・プロジェクトへの道程」
- ・豊川斎赫「『丹下健三1938-1970』展に寄せて」
- ・川口健一(東京大学教授)「丹下健三+坪井義勝そして川口衛」

- ・長谷川香(東京藝術大学講師)「国立代々木競技場の周辺環境とその歴史的文脈」

3.3. 展覧会特設ウェブサイト

2021年7月に公開した展覧会特設ウェブサイトは、展覧会の章構成および資料画像を掲載し、さまざまなきっかけでウェブサイトを訪れる幅広い人の興味・関心を喚起することが目指された。その一環として、展覧会を訪れることの難しい人に会場の雰囲気伝えることを目的とし、各セクションごとの展示風景を撮影した会場紹介映像を制作・公開した。ウェブサイトは令和2年度末で一旦公開を停止したが、コンテンツの再公開を準備中である。

3.4. シンポジウム

シンポジウム「丹下健三(つなぐ)：二つの間で」は2021年9月9日に開催・収録された。シンポジウムは、国立代々木競技場に代表される丹下の功績を、人間的・歴史的・空間的他者を「つなぐ」という視点から再考しつつ、彼の建築作品を如何に「リヴィング・ヘリテッジ」として利活用し、後世に引き継ぐかについて議論するものである。プログラムは下記である。

① キーノートスピーチ

- ・丹下健三とル・コルビュジエの間で

加藤道夫(国立近現代建築資料館主任建築資料調査官／東京大学名誉教授)

② 講演

- ・時間のなかの丹下健三：20世紀と21世紀の間で

加藤耕一(東京大学教授)

- ・丹下健三をいかに未来につなぐのか

DOCOMOMOの活動を通して 共感力と想像力を喚起すること

渡邊研司(DOCOMOMO Japan 代表理事／東海大学教授)

③ ギャラリートーク

- ・広島平和記念公園及び資料館

- ・丹下研究室の作業風景

- ・卒業設計「芸術の館」

- ・香川県庁舎

- ・東京カテドラル聖マリア大聖堂

- ・山梨文化会館

- ・国立代々木競技場の周辺環境とその歴史的文脈

- ・クロージングトーク

シンポジウムは一般公開での開催を避け、収録映像をウェブサイトで公開した。なお映像は日本語と英語の2か国語で作成した。翻訳は、長谷川香氏とヴォイチツケ・ロバート氏（国立西洋美術館リサーチフェロー）に担っていただいた。

4. 開催報告

丹下展の来場者数は14,179名（会期82日間）であった。この数値は当館の展覧会において「ル・コルビュジェ×日本」展（2015）、「安藤忠雄」展（2019）に次ぐものであり、丹下展を経て開館以来の来館者数は17万人を超えた。なお展覧会開幕より9月30日まで会期中のほとんどの期間が緊急事態宣言下であったことが、来館者数にマイナスの影響を及ぼしていることを付記しておく。

展覧会アンケートの結果からは、来場者の内訳では20代が2割を占め、来場のきっかけはSNSを含む口コミが5割を超えた。国立代々木競技場が改修工事を経て2020東京オリンピックでも活用され、注目されるとともに、2021年5月には国の重要文化財への指定が答申されるなど、丹下展会期前より、丹下の建築活動を歴史的に振り返る気運が高まっていた。これらのことから、丹下の活動を同時代的に知らない若い世代からも丹下の建築活動および丹下展に注目が寄せられたと考えられる。また、当館では初めてスマートフォンを使った音声ガイドを運用して好評を得た。

5. アーカイブズ展示としての丹下展

以下ではアーカイブズ展示としての丹下展の特徴を考察する。展示された建築プロジェクトのなかでもとりわけ多様な資料が紹介された成城の自邸を取り上げたい。展示資料は、設計時の検討図や写真、雑誌の紹介記事、室内に置かれていた丹下旧蔵の美術作品、そして後年の増改築案のスケッチ等であった。ここでは、竣工した建築を静的なものとして捉えるのではなく、設計段階から竣工後の暮らし、そして周辺環境の変化への対応等、時間の推移のなかで建築を一体的に捉える視点が提示された。

2020年度の調査では、田良島昭旧蔵資料に含まれる設計時の図面やスケッチの研究が進められ、図録に詳述されるとおり、丹下による成城の自邸を通じたモジュール研究と、平屋から2階建てにデザインが変化するプロセスが明らかにされた²。

アーカイブズの調査研究に基づく展示の特徴の一つ目は、成城の自邸の事例が示すように、設計や建設にお

ける創造のプロセスを、資料を通じて開示する点である。アーカイブズ資料は、完成作品としての建築にいたる手前において多様な可能性が検討されていたことを後世に伝え、設計者の様々な審級における判断の積み重ねを記録している。成城の自邸の設計のプロセスからは、展示で示されたように、丹下が目指す近代的な生活の在り様と伝統建築の工法を統合する試みを見出すことができる。

一般的に建築資料が作成されるのは、建築物の施工を目的とし、明確な用途を有するという意味において現用資料とされる³。それゆえ建築資料は建物が竣工した後に半現用になり、取り壊された場合には非現用となり、その経過にしたがって、保存の対象から外れていくことが多い。本展覧会に出陳された資料のなかにも、なかば破棄される状況から、個人や組織の尽力により今日に継承された資料が含まれる。成城の自邸のように現存しない建築について、われわれは残された建築資料を通じてのみ、建築を再構成することができるのであり、また、建築家の設計思考のプロセスや、協働した人物の存在とそこで行われたであろう対話に接近していくことができる。このように建築資料は現用か否かによってのみだけでなく、建築家の思考に触れたり当時の建築文化の在り様を後世に伝えるという、資料に固有の歴史的・文化的価値においても評価され継承されていくべきものだと考えられる。

二つ目の特徴は建築が集団的に作られるという性質に由来する。先述のように本展覧会は多数の所蔵者から資料を借用することによって成立した。電子媒体での提供を含め、国内外から当館展示室に集められた資料を通じて可視化されたことは、丹下建築が、数多くの協働者によって集団的に練り上げられていったことである。言うならば、本展覧会は丹下を起点にして、坪井義勝、川口衛、横山不学、磯崎新、田良島昭、石元泰博、イサム・ノグチ、岡本太郎、川添登等の個人および、企業等、記載し尽くすことのできない数多くの人々による建築活動のネットワークに触れ、繋がっていくものであり、「集合知」としての丹下建築のありようを、多数の資料によって示した⁴。このような意味で展示を通じて、丹下建築の作者は多数化され、拡散されていた⁵。このことは次のように言い換えることができるだろう。すなわち、本展覧会は戦争や経済成長、オリンピックなどの国家的プロジェクト、伝統の再考や美術、出版文化、海外との交流、情報化社会等を担った多彩な人々が紡いだ近現代の建築文化を「丹下健三」という切り口から指し示すものであった。

建築を中心とするこれらのネットワークは、会場に集結させられた資料を通じて空間的に再構成された。それゆえ、展示室は、丹下と直接または間接に刺激し合いながらそれぞれの場所で行われた人々の試行錯誤が鳴り響く場となった。このような制作プロセスと作者の複数性の開示はアーカイブズ展示の特質であると言えるだろう。

6. おわりに

丹下展では、多様な建築資料の会場展示や図録、そしてウェブサイトやシンポジウム等を通じて丹下の設計思想や建設のプロセスが紹介された。また丹下と構造家や写真家等との協働にも光が当てられた。本稿では丹下展の企画概要を記し、そこにおけるアーカイブズと展示の関係について考察した。丹下展の制作プロセスがそうであったように、展示活動は収集業務・保管業務・調査研究といったアーカイブズ業務の蓄積の上に成り立つものである。これらは当館の内部で完結するものではなく寄贈者や館外の研究者との協力、および一般の利用者への資料公開を通じて蓄積されていくものであり、それによって資料の重層的な意義や価値は徐々に明らかになっていく。展覧会の際に展示公開の対象となる資料はアーカイブズのなかのごく一部にすぎない。しかし、その公開を通じて広く建築文化の振興、および理解増進に貢献できれば幸いである。

謝辞

本稿は、加藤道夫（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官）、豊川斎赫（千葉大学准教授）、田良島哲（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官）、山口俊浩（文化庁企画調整課）、小池周子（国立近現代建築資料館研究補佐員）の助言、協力による。ここに記して御礼申し上げる。

注

- 1 当館の事業の枠組みについては、当館公式ウェブサイトを参照。<https://nama.bunka.go.jp/overview/operations.html>（最終閲覧：2022.4.1）
- 2 豊川斎赫『丹下健三1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで』展覧会カタログ、文化庁国立近現代建築資料館、2021、pp. 24-27
- 3 現用・非現用という資料管理学上の言葉遣いを建築資料に置き換えた際の意味と用法については、下記を参照。山口俊浩「編集後記 媒体の継承と活用に向けて」『建築雑誌』第125集1610号、日本建築学会、2010.11、p. 45
- 4 「集合知」の概念については、加藤道夫氏よりご教示い

ただいた。また、保坂健二郎氏が、展示では明示されなかった岸田日出刀の影響に言及し、岸田が丹下の活動をかたち作る重要な一部であることを指摘した（保坂「丹下健三展の楽しみ方」『すばる』集英社、2021年9月、pp. 296-97）。

- 5 丹下建築を複数の作者によるものとする観点からの研究は、豊川斎赫『群像としての丹下研究室—戦後日本建築・都市史のメインストリーム—』（オーム社、2012年）で示されており、丹下展企画の重要な先行研究となっている。なお資料および展示に潜在するプロセスや作者の複数性については、ボリス・グロイス『アート・パワー』2017年、現代企画社、pp. 156、157、160、161。

（2022年5月13日原稿受理）

【展覧会】

丹下健三 1938-1970

—戦前からオリンピック・万博まで—

会期：2021年7月21日（水）～10月10日（日）

主催：文化庁

協力：株式会社丹下都市建築設計、内田道子、公益財団法人東京都公園協会、独立行政法人日本芸術文化振興会、ワールド・モニュメント財団、アメリカン・エクスプレス、一般社団法人 DOCO MOMO Japan、高知県立美術館

会場：文化庁国立近現代建築資料館

企画：文化庁国立近現代建築資料館

加藤道夫（主任建築資料調査官）

木下紗耶子（研究補佐員）

小池周子（研究補佐員）

清水信宏（研究補佐員）

・ゲストキュレーター

豊川斎赫（千葉大学准教授）

・制作協力

国立大学法人千葉大学

豊川斎赫

勝原基貴（千葉大学特任研究員）

・会場展示

グラフィックデザイン：寺山祐策事務所

特設ウェブサイト：大田暁雄

会場設営：株式会社第一広房

展示輸送：TERRADA ART ASSIST

映像編集：岡篤郎

資料修復：有限会社東京修復保存センター

美術照明：竹下誠司（合同会社サムサラ）

翻訳：株式会社フリーズクレーズ

音声ガイド：株式会社ケイカ

模型製作：諏佐遙也（ZOUZUO MODEL）

【図録】

発行・監修：文化庁

編集：文化庁国立近現代建築資料館

執筆協力：川口健一（東京大学生産技術研究所教授）

長谷川香（東京藝術大学講師）

装丁デザイン：寺山祐策事務所

翻訳：株式会社フリーズクレーズ

資料撮影：佐治康生、坂本敦宏

印刷・製本：株式会社東京印書館

表1 丹下展出品リスト

文化庁 国立近現代建築資料館
令和3年度企画展

丹下健三 1938-1970：出品リスト

凡例：資料名 | 制作年 | 縮尺 | 寸法 (mm) | 技法・素材 | 制作／撮影者 (丹下健三以外の場合) | 所蔵者／著作権者
※不明ないし該当のない項目は不記載とした ※●マークは期間中展示替えを行った



Section 1：戦争と平和	
丹下健三ポートレート 990×1500 写真 撮影：田澤進 新潮社	
慰霊祭 (1955年8月6日) に集う人々 (撮影：丹下健三) 1955 5 min スライドショー 個人蔵	
広島平和記念資料館 立面図 1950 1/100 542×1074 図面 (複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部	
断面図 1950 1/50 542×1074 図面 (複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部	
広島平和記念資料館 航空写真 1955 頃 写真 撮影：二川幸夫 文化庁国立近現代建築資料館蔵	
広島平和記念資料館 1955 頃 写真 撮影：二川幸夫 文化庁国立近現代建築資料館蔵	
広島平和記念資料館 模型 2013 1/100 222×3200×900 スチレンボード、紙 制作/所蔵：東京造形大学 沖研究室・上田研究室	
Central Theme of Hiroshima City Planning 1953 316×240 冊子 『Peace City HIROSHIMA』所収 個人蔵	
AN OUTLINE of CHILDREN'S CENTER PROJECT 1951 299×210 書類 個人蔵	
広島平和記念都市建設計画についての意見書 1951 360×258 書類 個人蔵	
競技設計模型 1953 頃 227×317 写真 撮影：平山忠治 個人蔵	
CIAM8 LONDON 1951: the City 1951 326×233 冊子 個人蔵	
「広島計画 1946-1953」 1954 210×290 『新建築』1954年1月号所収 新建築社	
平和大橋「つくる」(イサム・ノグチ) 1953 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影：石元泰博 高知県立美術館蔵	
広島平和記念資料館本館 1953 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影：石元泰博 高知県立美術館蔵	
丹下研究室の作業風景 1952 写真 個人蔵	
丹下健三がイタリア・ローマから家族に送った手紙 (1951年7月3日) 1951 105×150 書簡 個人蔵	
丹下健三がイタリア・フィレンツェから家族に送った手紙 (1951年8月10日) 1951 105×150 書簡 個人蔵	
天体望遠鏡のレンズ φ 155 レンズ 個人蔵	
戦没学徒若人の広場 案内図・配置図 1965 図面 (マイクロフィルム複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所	
戦没学徒若人の広場 平面図 1965 図面 (マイクロフィルム複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所	
戦没学徒記念館 模型 2013 1/200 1590×700×510 木 制作：神戸大学大学院遠藤秀平研究室 香川県立ミュージアム蔵	
大東亜建設忠霊神域計画 模型 2013 1/1000 2309×1620×150 木 制作：滋賀県立大学 松岡拓公雄研究室 香川県立ミュージアム蔵	
大東亜建設忠霊神域計画 鳥瞰パース 1942 900×620 図面 (複製) 『建築雑誌』1942年12月号所収 日本建築学会 個人蔵	
『建築雑誌』 1942 210×300 雑誌 『建築雑誌』1942年12月号 日本建築学会 個人蔵	
Section 2：近代と伝統	
●「芸術の館」配置図 (CHATEAU D'ART 1) 1938 1/700 650×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●一階平面図 (CHATEAU D'ART 2) 1938 1/250 645×950 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●二階平面図 (CHATEAU D'ART 3) 1938 690×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●三階平面図 (CHATEAU D'ART 4) 1938 1/250 690×955 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●北面図 東面図 (CHATEAU D'ART 11) 1938 1/250 640×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●南面図 西面図 (CHATEAU D'ART 12) 1938 1/250 640×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●全面東面図 南面図 東面図 西面図 (CHATEAU D'ART 13) 1938 640×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●断面図 (CHATEAU D'ART 14) 1938 1/250 640×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●外観パース (CHATEAU D'ART 15) 1938 650×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●透視図 (CHATEAU D'ART 16) 1938 650×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●透視図 (CHATEAU D'ART 17) 1938 640×960 図面 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵	
●芸術家倶楽部の大サロン 透視図 (CHATEAU D'ART 19) 1938 図面 (複製) 東京大学工学系研究科建築学専攻蔵	
卒業設計「芸術の館」 模型 2013 1/100 206×1627×1225 木 制作：千葉工業大学工学部 古市徹雄研究室 香川県立ミュージアム蔵	
成城の自邸 32尺×15尺案 (立面図) 213×305 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵	
32尺×15尺案 (平面図) 210×307 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵	
50尺×18尺案 (立面図) 210×308 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵	
50尺×18尺案 (平面図) 210×308 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵	
60尺×18尺案 (立面図) 床高：1400mm 290×560 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵	
60尺×18尺案 (立面図) 290×560 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵	
西面道路から入庫庫案 1964年頃 360×432 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三 個人蔵	
南面道路から入庫庫案 (1) 1964年頃 394×424 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三 個人蔵	
南面道路から入庫庫案 (2) 1964年頃 367×426 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三 個人蔵	
外観 276×199 写真 個人蔵	
内観 276×199 写真 個人蔵	
外観 276×199 写真 個人蔵	
外観 (撮影：丹下健三) 1953年頃 写真 個人蔵	
手帳に記された自邸の断面検討図 1952 145×95 手帳 丹下健三 個人蔵	
平面図 2018 297×420 図面 (復元) 作図：野口直人 東海大学工学部野口研究室蔵	

断面図 2018 297×420 図面(復元) 作図:野口直人 東海大学工学部野口研究室蔵
断面図 床高:1400mm 433×555 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵
断面図 床高:1920mm 444×555 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵
イサム・ノグチから贈られたオブジェ 380×320×150 陶 イサム・ノグチ 個人蔵
犬 370×510×510 陶 岡本太郎 個人蔵
丹下自邸 模型 2013 1/30 685×1200×1202 木 制作:芝浦工業大学工学部 堀越英嗣研究室 香川県立ミュージアム蔵
内観写真 写真(複製) 撮影:石元泰博 ©高知県, 石元泰博フォトセンター
透視図 280×790 鉛筆、トレーシングペーパー 丹下健三、田良島昭 個人蔵
桂離宮 1953 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵
古書院東南角の石垣 1953 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵
松琴亭前から天の橋立を見る 1953 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵
Section 3: 戦後民主主義と庁舎建築
旧東京都庁舎 東西断面図 1/100 800×1150 図面(青図) 丹下健三計画研究室 岡本太郎記念館蔵
中二階平面図 1/100 740×1060 図面(青図) 丹下健三計画研究室 岡本太郎記念館蔵
北立面図 1/200 540×796 図面(青図) 丹下健三計画研究室 個人蔵
透視図 539×794 図面(青図) 丹下健三計画研究室 個人蔵
香川県庁舎 模型 1958 841×1189 写真(複製) 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵 ©高知県, 石元泰博フォトセンター
三階平面図 1955 1/100 811×1128 図面(複製) 丹下健三計画研究室 ハーバード大学大学院デザイン学部
断面図 1955 1/100 811×1128 図面(複製) 丹下健三計画研究室 ハーバード大学大学院デザイン学部
香川県庁舎 模型 2013 1/100 584×1299×903 木 制作:日本大学生産工学部 川岸梅和研究室 香川県立ミュージアム蔵
倉吉市庁舎建設記録映像 1955年頃 12 min 映像 撮影:山本繁喜 生田昭夫(堂計画室)蔵
Section 4: 大空間への挑戦
広島子供の家 配置 平面 断面図 1952 1/100 542×1070 図面(青図) 丹下健三研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
配筋図 1952 1:20 540×834 図面(青図) 丹下健三研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
横断面・縦断面詳細図 1952 1/100 547×1075 図面(青図) 丹下健三研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
広島子供の家 模型 2013 1/50 160×602×600 木 制作:金沢工業大学環境・建築学部 西村督研究室、竹内申一研究室 香川県立ミュージアム蔵
愛媛県民館 断面図 1952 1/100、1/50 530×1064 図面(青図) 丹下健三研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
愛媛県民館 模型 2013 1/100 150×801×700 木 制作:金沢工業大学環境・建築学部 西村督研究室、竹内申一研究室 香川県立ミュージアム蔵
東京カテドラル聖マリア大聖堂 1964 写真(複製) 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵 ©高知県, 石元泰博フォトセンター
断面図 1963 1/100 800×1107 図面(複製) 丹下健三計画研究室 ハーバード大学大学院デザイン学部
配置図 1963 1/100 800×1107 図面(複製) 丹下健三計画研究室 ハーバード大学大学院デザイン学部
東京カテドラル聖マリア大聖堂 模型 1963 1/200 355×900×722 木 制作:石黒建築模型 宗教法人カトリック東京大司教区蔵
Section 5: 高度経済成長と情報化社会への応答
山梨文化会館 模型 2014 1/100 1140×990×1600 木 制作:植野石膏模型製作所 株式会社山梨文化会館蔵
南側立面図 1967 図面(マイクロフィルム複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所
二階天井伏図 1967 図面(マイクロフィルム複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所
一階平面図 1967 図面(マイクロフィルム複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所
『図集・日本列島の地域構造』 1967 300×300×100 書籍 日本地域開発センター 武蔵野美術大学図書館蔵
Section 6: 五つのキーワードの統合
国立代々木競技場(第二体育館 外観) 1964 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵
国立代々木競技場(第一体育館 工事中) 1964 406×508 ゼラチン・シルバー・プリント 撮影:石元泰博 高知県立美術館蔵
全体配置図 1962 1/600 796×1218 図面(複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部
立面図 1962 1/200 801×1223 図面(複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部
一階平面図 1962 1/200 824×1226 図面(複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部
第二体育館 一階平面図 1962 1/200 600×775 図面(複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部
トップライト詳細図 1962 1/50 818×629 図面(複製) 丹下都市建築設計 ハーバード大学大学院デザイン学部
第一体育館 竣工図(青焼製本) 図面(複製) 丹下都市建築設計 個人蔵
第二体育館 竣工図(青焼製本) 図面(複製) 丹下都市建築設計 個人蔵
国立屋内総合競技場 1963 1/600 1190×830×350 木 制作:石黒建築模型 日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館蔵
第一体育館 内観写真 1964頃 2200×1470 写真 撮影:二川幸夫 文化庁国立近現代建築資料館蔵 ※展示室ロビーに展示
第二体育館 内観写真 1964頃 1450×1100 写真 撮影:二川幸夫 文化庁国立近現代建築資料館蔵 ※展示室ロビーに展示
オーラルヒストリー(岡村幸一郎氏、荘司孝衛氏) 17min 映像 聞き手:豊川斎赫、鎌田恭彦、桐原武志、撮影:鎌田恭彦、編集:岡篤郎 文化庁国立近現代建築資料館蔵
国立代々木競技場周辺地域模型 2021 1150×3100 ミクストメディア 制作:諏佐遙也(ZOUZUO MODEL) 千葉大学豊川斎赫研究室蔵 ※中央円形台に展示
競技場のアプローチを示した構想メモ 1961 420×305 書類 個人蔵
丹下健三手帳に記された国立代々木競技場の検討 1962 145×95 手帳 個人蔵
ガラスケース内展示
「都市計画」講義ノート(大歳幹夫記) 1952頃 250×182 ノート 大歳幹夫記 個人蔵
磯崎新から丹下に宛てた書簡 1959 361×258 書簡 磯崎新 個人蔵
MITにおける丹下の講評会風景 写真 個人蔵
ボストン湾2500人のコミュニティ計画 断面図 A-A 複写物 個人蔵

ボストン湾2500人のコミュニティ計画 断面図B-B 複写物 個人蔵
『東京計画1960 その構造改革の提案』 1960 285×275 冊子 丹下健三+都市・建築設計研究所 文化庁国立近現代建築資料館蔵
『東京計画1960 その構造改革の提案』 1960 285×275 写真 個人蔵
太陽の塔 骨組み梁間隔(高さ)2.5m 1968 384×268 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
太陽の塔 腕部伏図軸組図 断面リスト 1969 532×770 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
日本万国博覧会・基幹施設マスタープラン 210×290 雑誌 『新建築』1966年7月号、1967年4月号 新建築社
ル・コルビュジェから丹下に宛てた書簡 1959 270×210 書簡 ル・コルビュジェ 個人蔵
「MICHELANGELO 頌—Le Corbusier 論への序説として—」 1939 180×260 雑誌 『現代建築』1939年12月号所収 日本工作文化聯盟
建築から都市へ拡張する丹下モデュロール(神谷宏治「一宮団地計画」) 1961 255×335 雑誌 『建築文化』1961年6月号所収 彰国社
丹下健三手帳に記されたモデュロールの検討 1952 145×95 手帳 丹下健三 個人蔵
広島平和記念資料館のモデュロール(大谷幸夫「課題の発展に対応したモデュロール」) 1955 240×260 雑誌 『国際建築』1955年11月号所収 国際建築協会事務所
丹下からグロピウスに宛てた書簡 1955 274×189 書簡 個人蔵
グロピウスから丹下に宛てた書簡 1955 280×215 書簡 個人蔵
丹下からバイヤーに宛てた書簡 1956 275×208 書簡(複製) 個人蔵
倉敷と広島を訪れるグロピウス夫妻と丹下夫妻 1954 写真 個人蔵
成城の自邸を訪れるグロピウス夫妻 外観 1954 写真 個人蔵
「グロピウスとパウハウス」展 リーフレット 1954 258×365 印刷物 個人蔵
グロピウス箱根座談会のための事前協議資料(丹下健三記) 1954 358×252 書類 丹下健三 個人蔵
グロピウスの講演会のためのメモ 1954 便箋6枚 書類 丹下健三 個人蔵
東京都庁舎計画・有楽町 1952 180×240 雑誌 『国際建築』1952年12月号所収 国際建築協会事務所
東京都庁舎計画 1952 210×290 雑誌 『新建築』1952年12月号 新建築社
都庁の“部”間交流を円の大きさに表したもの(「関係・分布・流れ」) 1967 255×355 雑誌 『建築文化』1967年4月号所収 彰国社
内観 写真 川崎市岡本太郎美術館蔵
空中写真 写真 個人蔵
旧東京都庁舎模型 写真 個人蔵
香川県庁舎を眺める丹下氏写真 写真 個人蔵
香川県庁舎低層部・高層部計算書 1958 275×380 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
墨会館 ヒロティ 写真 個人蔵
墨本社記念館新築工事構造計算書 一般事項 1957 268×380 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
墨記念館新築工事構造計算書 荷重項 1956 268×380 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
旧草月会館 内観 写真 個人蔵
旧草月会館 外観 写真 個人蔵
草月会館構造計算書 構造略図 1955 280×380 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
草月会館構造計算書 地震力の算定 1955 280×380 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
今治市公会堂構造計算書 1957 270×388 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
今治市庁舎 外観 写真 個人蔵
「広島市の平和記念聖堂設計競技発表」 1948 新聞 『カトリック新聞』1948年7月11日号
『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』 1949 180×260 書籍 千葉大学 豊川斎赫研究室蔵
丹下案外観パース 1949 書籍 『平和記念 広島カトリック聖堂建築競技設計図集』1949年 洪洋社
丹下健三手帳に記された愛媛県民館の検討 1952 145×95 手帳 丹下健三 個人蔵
愛媛県民館 外観(丹下の赤いトリミング指示線入り) 写真 丹下健三 個人蔵
愛媛県民館 外観 写真 個人蔵
静岡県体育館構造計算書 1957 268×386 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
香川県立体育館 北・西立面図 1/100 767×1028 図面(複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所 ハーバード大学大学院デザイン学部
二階床版配筋図 1/100 767×1028 図面(複製) 丹下健三+都市・建築設計研究所 ハーバード大学大学院デザイン学部
外観 写真 ワールド・モニュメント財団蔵
東京カテドラル聖マリア大聖堂 設計競技案スケッチ 1962 210×290 雑誌 『新建築』1962年7月号所収 新建築社
設計競技案模型 写真 撮影: 阿久井喜孝 個人蔵
クウェートスポーツセンター計画 一階平面図 1969 図面(複製) 丹下都市建築設計 文化庁国立近現代建築資料館蔵
シャボンを用いた吊り屋根検討 写真 『クウェートスポーツセンター報告書』1969所収
山梨文化会館構造計算図書 275×407 鉛筆、インク、紙 横山不学 横山建築構造設計事務所蔵
「山梨文化会館ここに誕生」 1966 410×546 新聞 『山梨日日新聞』1966年11月21日号
旧電通本社ビル アクリライト板を用いた光弾性実験 120×80 写真 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
供試体アクリルのヤング係数の測定 265×188 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
電通ビル1スパン2層の大架構造物の実験(アクリライト試験体 水平試験) その2 265×188 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
電通本社実験用立面図 550×415 鉛筆、インク、紙 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
アクリライト板を用いた光弾性実験 120×80 写真 坪井善勝研究室 東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
都市の未来像 環境へのシステム的アプローチ 1971 280×290 書籍 『21世紀の日本: その国土と国民生活の未来像』1971年所収 新建築社
『日本列島の将来像: 21世紀への建設』 1966 105×175 書籍 講談社現代新書 個人蔵
『図集・日本列島の地域構造』 1967 290×310×80 書籍 日本地域開発センター 武蔵野美術大学図書館蔵